

(3) 実験の供試材料

コウライシバ 市販品を用いた。

ヒガンバナ 自生する鱗茎を採取して用いた。

自生するヒガンバナの鱗茎は、鱗茎の大きさにバラツキがあり
50 g $\pm$ 5 g のものを取り出し用いた。

(4) 植栽の月日

ヒガンバナの植栽 1997年1月

コウライシバの植栽 1997年3月

2. 実験の結果

(1) ヒガンバナの生育状況

ヒガンバナは植栽時には生葉のあるものを鱗茎の直上で切断して植栽したために生葉が出る時期が遅れ2月中旬に生葉が出はじめた。

ヒガンバナの生葉が2~5 cm出た時期を見はからってコウライシバを植栽した。

その後ヒガンバナはコウライシバの間から生葉を出し続けて生育した。

4月下旬にヒガンバナの生葉が枯死を始めたので生葉長を測定した。

各供試区よりランダムに20個を選び生葉長を測定した結果は次のとおりであった。

①区 27 cm $\pm$ 4 cm (40個体平均) ②区 30 cm $\pm$ 3 cm (40個体平均)

③区 26 cm $\pm$ 5 cm (40個体平均)

5月中旬にはヒガンバナの生葉は全て枯死し、9月18日に花茎が出はじめ

10月3日頃より開花した。

1998年は1月10日頃から全区ともに生葉が出始め、現在(3月初旬)の生葉長は15~20 cmである。

(2) コウライシバの生育状況

各区とも1997年の生育状況については、生葉長、ランナー長などにバラツキがあり計測は不可能であった。

ただし、枯死したものは無く感性的には対照区と同様に生育していることが認められた。

3. 実験の考察

本実験は開始したばかりであり、植生の遷移についても調査を行いながら実験を進める必要がある。

1997年の調査結果では次の事項が認められた。

- ・ ヒガンバナの鱗茎重量が50 g程度の個体は、生葉を鱗茎直上で切断して植栽しても枯死することなく、全ての個体で生葉が発生した。
- ・ 植栽密度と生葉長には感性的ではあるが、植栽密度による差異は認められなかった。
- ・ コウライシバの生育状況は感性的ではあるが、対照区とほぼ同じような生育状況がみとめられた。